

平成 23 年度

事業所名 : グループホーム 水沢コスモス

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370400178		
法人名	社会福祉法人全人会		
事業所名	グループホーム水沢コスモス		
所在地	〒023-0003 岩手県奥州市水沢区佐倉河字十日市85		
自己評価作成日	平成 24 年 4 月 3 日	評価結果市町村受理日	平成 24 年 6 月 29 日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	「介護サービス情報の公表」の公表後にリンクできるようにします。
----------	---------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成24年 4月 4日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員の学習意欲が高まり、介護福祉士取得者が2名出た。職員の職場定着も安定し、24年度は勤続3年以上30%加算が算定できることになった。国家資格に裏付けられた熟練の職員が常に利用者側にいることができる環境は、グループホーム(以下GH)として理想により近くなったと自負している。毎年開催される全国GH大会、癒しの環境向上大会、奥州病院研究発表など、演題発表の機会を持つことも、職員の資質向上につながっている。当コスモスは男性利用者が多いのだが、高齢男性の平均余命が伸びている現在、今後の高齢者施設運営のあり様の一つとなりたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

このホームには、隣接して、同法人営の「デイサービスセンター」(フィラン)、「グループホーム」(アリス)があり、防災協力や夜間業務などを通して、職員のみならず利用者とも緊密な連携協力・交流がなされている。利用者の殆ど(9人中8人)が男性の利用者ではあるが、ホームの中で男同士で役割意識をもって生活、自分の居場所を確保して笑顔豊かに暮らしている。職員は、自己啓発はもちろん、法人・事業所内の研修、全国研修にも積極的に参加して、知識や技術等資質を高めているほか、毎月「今月、自分は楽しかったか?」という振り返りを重ねながら、自分の気持ちも出していける嘘のない場面作りを目指している。男性利用者が多いという独自性と、職員を大切にする姿勢を背景として、職員の高い意識とチームワークのもとで他にはないような生活場面を生み出していくことが期待できる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会】

事業所名：グループホーム 水沢コスモス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	日々の話し合い、毎月の合同会議、年4回のパーティ、運営推進会議等で確認し合っている。特に職員採用面接に現任職員が立会うことで理解が深まるようになった。	知らず知らずのうちに職員本位になることがあることを意識におき、何かあれば「ドキッと報告書」に記載し、事例に基づいて利用者本位の関わり方を再認識している。利用者対応は、あくまで「個人対応」が基本、を徹底している。	全人的ケアという理念は事例検討に具体性を探していくことで、職員全体に浸透している。また新職員採用時から現場職員が関わることも、チームワークの良さにつながっている。今後も職員の意識共有は大切にしていってほしい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会への参加、地元振興会の会員になる、佐倉河地区文化祭への出品など、佐倉河地域の一員として参画し、交流している。さくらの湯は散歩コースである。	散歩をはじめ、ホームの夏祭りや法人主催のパーティーなどへの参加を通じて交流を深めている。地域の文化祭にも、参加から手づくり作品の出品(参画)するなど、地域の一員としての理解が深まり、つきあひも年々深まってきている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当会の在宅介護支援センター職員が、年4回のパーティーや運営推進会議に協力し、民生委員の参加を得ている。認知症を具体的に理解できる機会となっている。保育園児を対象に遊びを通じて触れあひの機会を設けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎月の合同会議を運営推進会議に広げ、第三者委員や民生委員、包括支援センター職員の参加により、実践状況を見ていただき、ご意見を頂いている。パーティを運営推進会議に合わせているので、ご家族の真摯なご意見を頂戴できる。	概ね2ヶ月ごとの開催しており、委員からは、地域の情報を得たり、夏祭り等行事への参加を得たりして、ホームの理解を深めていただいている。会議の中に、「介護報酬の改定」など、勉強会的な内容も含めて、会議の充実に努めている。	地域の日常的な情報を得るものとして、事業所では回覧板を回してもらえればと考えている。委員に相談しながら回覧板を通じた近所づきあひも実現していってほしい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者と計画作成担当者は、介護認定審査会委員である。当会の在宅介護支援センター活動を通じて市町村との情報交換も密である。運営推進会議には包括支援センター職員の参加がある。介護保険認定更新時は市町村職員が訪問調査するので、介護の実際を見ていただく良い機会となっている。	普段は生活保護の担当職員の訪問があった際に意見交換したり、そのほか推進会議の際に直接に、また包括支援センターを通して間接的に、電話等でも気軽に情報交換・相談ができています。行政の部署間でも事業所の情報を共有しており、スムーズなコミュニケーションにつながっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	当会で最も忌み嫌う身体拘束は、向精神薬の服用である。次に、認知症治療薬の無期限投与である。特にご家族が認知症治療薬に依存している現状を変えにくくことに苦慮している。玄関の施錠は、外での危険＝交通事故、用水路での水死、凍死などとの兼ね合いがある。	「認知症治療薬の無期限投与」などの事例を通し職員会議の際には、必ず議題の一つとして取り上げ、検討・協議・共有しあっている。「拘束につながりそうなケアの芽を摘む」ことを基本にしている。	玄関の施錠は、女性職員が大半のなかで利用者は8名が男性のため、緊急時の対応が困難という背景もある。実情に沿った対応と共に、何らかの代替案も継続的に模索していってほしい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待には、様々な形態がある。暴行や放置などに目が行きがちだが、わいせつ行為や財産詐取なども虐待である。特に家族によって金品を詐取されている場合は、分かっている手出しようが無いのが現実である。管理者は常に様々な事例を示し、注意喚起を怠らないよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は昨年、成年後見人の有資格者であるが、現在までご家族からの相談は無い。しかし、権利擁護事業を始めたいご家族への助言はしているし、この制度が滞りなく実行されるよう支援している。相談のないご家族には手の施しようがなく、困惑している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書で説明し、さらに重要事項説明書で理解を深めてもらっている。入居時調査票への記入もご家族にお願いし、想いの共有化を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書で充分説明している。毎月のお会計時、運営推進会議、パーティなど様々な場面で、意見を聞く機会を設けている。しかし、それらの場に一切現れず、唐突に他事業所に不平不満をばら撒くご家族があり、対応に苦慮している。	3ヶ月ごとにホームの広報を発行するほか、毎月、職員からの利用者ごとの状況や写真を送ったり、アンケートをとるなど、意見を出しやすい雰囲気・関係作り心配りにしている。運営面について出される意見等は少ない。利用者との関係性から何が本人本位なのか理解が難しい家族もあり、気持ちのはげ口という役割も認識しながら根気強く対応を重ねている。	家族への細かな連絡や意見を聞く姿勢は家族の安心感につながっており意義が大きい。行事などの内容以外にも日常のパーソナルな様子を伝えることで、家族からの意見が増えることを期待したい。また家族が客観的な状況理解を得るために、第三者を交えた場面作りも一考である。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日のミーティング、毎月の会議、復命書、企画書、決裁書などで多くの意見や提案を聞く機会を設けている。ピラミッド型の組織にせず、横並び型でどの職員にも発言の機会を設定している。24時間以内に管理者まで到達する仕組みがある。	会議は、隣接の施設と合同で開催され、運営者も参加している。運営・ケアについて自由な話し合いが行なわれ、職員から、「室内で体を動かす方策」という提案から、ラジカセを購入して、音楽での運動を始めるなど、素早く対応している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	複数回の人事考課により、客観的に自分を評価する機会を設け、職場意欲の向上に努めている。就学、公的資格取得、介護認定審査員への協力など、法人として支援を惜しまない環境がある。現在、看護学校在学中の職員がいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	グループホーム全国大会、癒しの環境全国大会、奥州病院への演題発表参加は、長期の計画に基づき、理事長、管理者、リーダーを交えての検討を重ねた結果の成果である。演題発表は、総合的な研修の場として、当会でもっとも重要な位置を占めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	家族介護者教室、パーティ、夏祭りなどには必ず情報を発信し、同業者の参加を呼びかけ、交流の機会作りを積極的に行っている。法人のホームページにも、最新情報を掲載している。見学も正式な申し込みには応じており、交流の機会を作る仕組みがある。鳥取県や兵庫県の同業者との交流がある。今年度こそ、2回目の全員研修を秋田県で行いたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用申し込みを頂き、利用開始に至る間に、自宅に伺い、本人の口から思いを聞き、本人の生活の実態を把握する機会を必ず作っている。病院退院と同時開始の方もおられるが、病院からの情報を必ず頂く。最近はヒルズココ利用からの転居もあり、情報の共有がより進んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用申し込みを頂き、利用開始に至る間に、ご家族に入居時調査票を記入していただき、実態を把握する機会を必ず作っている。当会の通所介護利用からの移行入所が多いので、初期の信頼関係は既に構築されていることが多い。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用申し込みを頂いた際には、担当介護支援専門員や包括支援センター等への問い合わせを必ず行い、他の社会資源活用を探っている。安易にグループホーム利用でその場を切り抜けるのではなく、長期支援を視野に入れ、最適な支援方を話し合っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	『そうですね、いいですね』と利用者の全てを肯定することだけでなく、時には職員が利用者へ反抗したり、利用者同士が小競り合いをしたり、誰かがとりなしたりという様々な精神活動があつてこそ、共に暮らす意義がある。そういう職員教育をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	年4回のパーティ、家族介護者教室、家族参観日、などを通して認知症介護は家族とともに築いていくものであること、私たちが介護者側には家族の支えが必要であることを伝えている。任せたらと言いつつ家族がおり、困惑している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用開始に際し、ご家族に入居時調査票を記入していただき、その方固有の過去歴を大切にしている。	年々関係の範囲が狭くはなっているが、これからは出来るだけ長く、友人知人、親戚、元職場の部下などの訪問を得て、心穏やかに時間を過ごすように支援を継続したいとしている。馴染みのお茶屋さんへの買い物は、ずっと続いている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	親密な関係だけが関わり合いではない。陰湿な感情の表出も重要な精神活動であることを職員が理解し、利用者同士の絆を深め合えるよう支援している。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者のリロケーションダメージを最小にできるよう綿密な計画をたてて支援してきた。しかし、今春、新規開業の特養事業所が、市内介護施設利用中の方々と異動させており、これまで培ってきたすべてが水泡となった。今は、関係を断ち切らない支援よりも、廃捨て支援をご家族が選択したように感じている。	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用開始に際し、ご本人に必ず会い、お話を直接伺い、さらにご家族に入居時調査票を記入していただき、様々な角度から実態を把握している。ご家族に本人本意の理解を得られず、苦慮している1例がある。	本人がしたいこと、好きなことなどについて、本人家族などから聞き取って対応するほか、日々の寄り添いや声がけなどで得た情報も大切に記録して共有しあっている。職員の「利用者の立場や思いに添った」個別ケアの徹底に努めている。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始に際し、ご本人に必ず会い、お話を直接伺い、さらにご家族に入居時調査票を記入していただき、様々な角度から実態を把握している。全ての当会サービスは、その方の過去歴の共有から始まる。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居後調査票を、担当職員が記入し、決められた手順で見直しをしている(主として、介護認定更新時、心身の状況が大きく変わった時、介護環境に変化があった時などである)。	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用開始に際し、ご家族に入居時調査票を記入していただき、入居後調査票は担当職員が記入し、検討を続けている。本人、家族、ケアマネ、介護職員等々、ご本人を取り巻く様々な方の意見を反映できる仕組みがある。	居室担当・勤務担当職員が記録した、介護記録書を基にして、毎月、全職員でモニタリングを行い、3ヶ月を目途に、全職員で話し合っって見直している。職員や他の利用者、家族との関係性にも焦点を当て、日々の関わりに活かせるようにしている。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の行動、言葉、そのことについての職員の関わり、結果をそれぞれ時系列で記入できる個別の支援記録を作成し活用している。これは、当会のオリジナル書式である。	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用開始に際し、ご家族に入居時調査票を記入していただき、入居後調査票は担当職員が記入し、検討を続け、常に一人ひとりにあったサービスが何かを検討し、柔軟な支援をしている。グループホーム支援でのサービスの多機能化とはどういうこと指すのであろうか？	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用開始の際にご家族から頂いた、入居時調査票を基本情報として、個別の暮らしを支える仕組みを作っている。田んぼを見たり、白鳥を見に行ったり、当会グループホームは地域資源なくては暮らせない。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居に際し、かかりつけ医を変えてもらったことは無い。緊急時には、連携医療機関である奥州病院の協力をいただいている。受診時には、事業所から医療機関に文書で情報を出し、より適切な診療を受けられるよう支援している。	本人家族の希望するかかりつけ医となっている。定期的な受診については、家族が対応し、緊急や家族都合の際には、職員が臨機応変・柔軟に対応している。家族には「情報書」を持参させるなど、医師との連携に特に配慮している。	それぞれの医療機関へのきめ細かな情報提供は適切な受診とともに、家族の安心感や各医療機関との信頼促進につながっている。今後も継続を期待したい。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常的には、当会の看護師が関わっている。その他に、訪問看護ステーションと契約している。折々に気づいたことを、医療機関受診時に反映する仕組みがある。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関受診時には、当会から直近の健康状態情報を出している。本人は自分の状態を伝えることができず、ご家族も本人状態を把握していない。当会からの情報が認知症高齢者の加療には不可欠であることがようやく浸透してきた。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	いきなり重度化するわけではないが、ご家族にはその過程が把握しきれないようだ。段階ごとの説明と、ご家族意向の把握を常に行い、時系列に記録し、職員ご家族ともに最新の状態を共有するよう努めている。その結果、本人、家族ともども安らかな最後を迎えられた複数例を経験した。	今のところ、看取りについては、対応を考えていない。利用者の日々の暮らしや健康状態を見ながら、状態変化のあった際には、家族等と最善の方策・具体的な対応策を一緒に考えていきたいとしている。勉強会なども行いながら、終末期にあっても可能な限り「生活」を継続していくことを目指している。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	体温計、血圧計、パルスオキシメーター等を常備し、急変時のデータ採取、その後の連絡手順等トレーニングしている。グループホームでは、応急手当よりも専門スタッフへの正確かつ迅速な引渡しが必要である。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	2011年3月11日の地震と停電、4月7日の余震と停電を経験した。速やかな対応ができ、一人の事故者も出さなかった。また、火災通報装置については、スプリンクラー適応除外が認められ、消防検査も済んだ。	訓練は、隣接のデイサービスセンターとグループホームと合同で実施している。協力体制については、隣接の職員との日常的な連携の中で、その体制を確保し、いざという時に備えている。今後、地域のためにもAEDの設置を検討したいとしている。	事業所では今後、屋内の壁を不燃材に変えていく予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居前調査票によって、お一人おひとりが、何に傷つくのか、何を誇りとしているのかなどを把握するよう努め、入居後も検討を重ね、情報を職員皆で共有している。	男性利用者が多いということもあり、特に「尊厳」に配慮した対応を心がけている。声がけは「さんづけ」で行なうほか、それぞれの生活暦・職歴(元市の公務員、元先生、元社長)を参考にしながら、個別対応で尊厳の徹底を図っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居前調査票によって、お一人おひとりが、どのような希望を持っているのか、どのような納得の仕方をするのかなどを把握するよう努めている。本人決定の結果、辻褄が合わないことが多くあるが、事後処理が職員の務めと心得ている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	些細なことでも、ドキッと報告書を、職員、リーダー、管理者で検証している。様々な意見を自由に交換することによって、職員都合が優先されたか否かが分かってくる仕組みを作っている。さらに1ヶ月をまとめ、職員会議で全体の意見交換を行い、職員都合を優先してはいけない職場作りを目指している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居前調査票によって、行きつけの理美容院を把握している。本人、家族の記憶を頼りにお店を探したこともある。なじみの理髪店さんの出張床屋も受け入れている。年4回のパーティ前には全員が綺麗になるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居前調査票によって、お食事の好みを把握している。食べるスピードも様々であり、その人の好みに任せており、片付けに多少の支障を来たしても職員は待っている。職員は必ず一緒に食卓を囲むことにしている。	利用者の声も聞きながら献立を作り、利用者と職員と一緒に買い物をしている。男性が多いということもあり、食事づくりに携わる方は多くはないものの、テーブル拭きや下膳・食器洗いなど片付けには、皆さんが出来ることに参加している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	時々、当会の栄養士に相談して、偏らないようにしている。医療機関受診時には、アルブミン値を測定してもらっている。利用の長期化に伴い食事介助が必要な方が増えている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の歯磨きやうがいを励行している。在宅介護支援センター主催の口腔衛生講演会により、職員の資質が向上した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	おむつ使用は原則行っていないが、利用長期化に伴い、夜間のみおむつ使用という方はいる。ポータブルトイレの持込みは認めていない。職員は、排泄はトイレで行うのが当たり前という意識を持ち、意欲的に取り組んでいる。ストーマ造設の方もいる。	職員は「オムツはしない」「失敗をさせない」を基本に意識を共有しながら、見守りや声がけ誘導している。職員はトイレで排泄するという習慣が利用者の自立性を維持することをお念頭におきながら支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況を把握し、食材にはきのこやヨーグルトを欠かさず、また、座らせっ放しにしないなどしている。基本的に毎日の排便状況に応じて下剤の量を決めている。高齢化に伴い、理事長に上申し、看護師による浣腸が必要な方もいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的に、入浴は毎日、午後に行っている。促しと本人意向により実施しているが、気分によっては入りたくないといふ方もいる。	ほとんどの利用者は、毎日、のんびりと楽しみながら入浴している。入りたがらない利用者には、職員は、決して無理強いをすることなく、根気比べ・知恵比べをしながら、気長に寄り添い、入浴のタイミング・チャンスを待ち、誘導している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居前調査票によって、入眠の状況や午睡の習慣を把握している。眠剤を使わず、自然入眠できるよう支援しているし、ご家族の了解、協力も得られている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬情報を保管し、薬は一人ひとり写真付の薬ケースに保管している。頓服薬などは、管理者に電話を入れ、服薬支援の前の複数確認を励行している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居前調査票によって、生活歴の把握に努めている。買い物や誕生会の準備、パーティの際のご発声など、様々な役割を担っていただいている。パーティの席でご家族から新たな情報をいただき、ご本人の違う面を発見することもある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご自身の希望を言える方は、グループホームにはあまりおられない。自身の希望を的確に伝えられない方がほとんどである。法人の庭がとても広く自然が一杯なので散歩に連れ出したり、買い物のお手伝いをお願いしたりしている。	普段は、ホーム周辺や温泉施設近くまで散歩したり、遠くには、火防祭見学や桜の見物などに出かけている。外出については、今後とも、適度の運動とストレス解消などのため、希望を聞きながら、当日の天候や利用者の気分とも相談しながら、その機会を増やしていきたいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金をお金と認識できる方は、ほぼグループホーム適応外である。当金はお金を持たせないようお願いしている。それでも、『小遣いを渡しても職員に盗られてしまう』と家族から言われる。給を買ったり、誕生日のプレゼントを買いに行ったりする費用は、法人が立て替えて後日ご家族に精算してもらう方法で、ささやかな楽しみごとの支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人から電話を掛けることも無く、ご家族が掛けてくることも無い方ばかりである。希望があれば支援する体制はある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	開放的なキッチンからは、煮炊きの音や匂いが漂ってくる。風呂場は古くはなったが家庭的な大きさで、外光が入り、気持ち良く入浴できる。リビングにはイギリス製の美しいソファがあり、家具が居心地良くセッティングされている。	食堂兼居間のスペースは、天井が高く、大きい窓からは、外の四季が楽しめ、暖かい日差しが、一日中差し込み、利用者の殆どが、食事の後も居室に戻ることなく、その場でそれぞれに、職員や利用者同士が寛ぎあうという、本当に開放的かつ居心地の良い空間であることが実感される。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自分専用の椅子があったり、物陰の置き畳で密やかに身を隠せる空間がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	男性入居者が多いせいか、お部屋づくりにまったく興味を持たないご家族が増えた。マスコミによる情報はたくさん持っけていても、認知症への理解ができておらず、現場とご家族との乖離は埋まらない。	タンスや畳、テレビなどを持ち込まれている利用者も居るが、男性ということもあり、多くの方は、時計やカレンダー、髭剃り、着替えが、その殆どである。入り口には表札代わりに「介護記録」(表紙)と同じカラーの表示が綺麗に掲げられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	コスモスは、認知症の方が生活する空間としては未完成部分がある。それでも、部屋間違ひもせず、自分の好きな席でくつろいだり食事をする姿をみると、入居者にとってコスモスは安全で安心できる環境であることを感じる。		